

山に親しみ山に想う (13)

— 濟州島の寄生火山 (3) —

<文・写真> =岡本=

3. オルムの四季

オルム探訪の小冊子「オルム」を読み返して、その中からオルムの四季を描写している部分を抜粋する(「」で引用)。それは断片的であり、短い句節の羅列に過ぎず感傷過多気味であるが、独りでオルムを求めて歩いている時の心情をありのまま物語っている。

(1) 春

・墓が野辺を覆う低いオルムを歩いた(5月)。

「鶯が可愛い声で鳴く。山鳥がグワツグワツと濁声で鳴く。前方にクムオルムがオルム全体で春の緑を誇っている。空は五月晴れである。足元では、草葎の墓がオルムの全斜面を覆う。

—ボウボウの 青山の前 我至る—、

—見捨てられ 顧みられぬ 土饅頭 春を知らせる 鶯の声(放棄された墓が幾つもあり、行政の頭痛の種になっている)—」

・漢拏山ハルラサン国立公園内の1100m程の深山に分け入り、流れの無い涸れ沢を幾つも渡って進んだ(5月)。「倒木の幹に、苔の他に野草が盆栽のように可愛く育っている。自然の生態の不思議である。自然林に覆われて空は見えない。緑のカプセルの中に閉じ込められたようだ。鳥の鳴き声は意外に少ない。幾つかの水溜りでは、発育の遅いオタマジャクシがいる。…登るにつれて、背の低い自然林となり、松が点在する。少しずつ植生が変わる。山椒の木が多く、香りが漂う。樹間より漢拏山が見え始める。陽光燦々。」

(2) 夏

・150m程の低いオルムに、在日濟州島出身者が寄進した共同墓地があり、墓域は野鳥の天国でもある(6月)。「無人の墓地の中、カッコウ(郭公)、ホトトギス(不如帰)が鳴く。名も知らぬ鳥がチョチョ。鳥の鳴き声の交響である。足元から30cm程の蛇が逃げていく。…人跡路の入口で紫陽花が群生している。蛙が跳ぶ。草いきれで一層蒸す。雑木林の中は暗いほどである。…本当に鳥



が多い。枝から枝へ飛び交う。ヒヨドリのような。…切り株からひこばえが勢いよく伸びている。」

・漢拏山の勇姿を眺めながら、800m程の緑陰の尾根を歩く(6月)。「ホトトギスが「特許許可局」と鳴く。陽のあたる樹林の緑は、透きとおるような透明度を帯びて輝き、反対に陰の緑は深海のような静まりに沈んでいる。陰陽の緑の中に浸る自分が歩く。…(頂上の尾根で)漢拏山の雄

大な山容、深い緑の樹海、優しく延びる稜線、陽光燦々、喜悦に浸る。」

・陽を浴びて村の人が墓の手入れをしている、のどかなオルムである(6月)。「6月の陽光が

射す。4人がオルムの頂上にある墓の芝地を手入れしている。他に人影はない。風が草を靡かせ、虫が鳴き、馬が草を食む。樹林、畑、墓地。そして雲の影が草地の面を動いていく。長閑な風景である。」

・真夏に牧場内の600m程のオルムを登る(7月)。「頂上に着く。山火事警防所がある。草地である。帽子の縁から汗が滴り落ちる。ムウとする草いきれ。馬の糞が臭う。蝶が舞う。トンボが群れ飛ぶ。虫の鳴き声。鳥のさえずり。秋の七草の撫子が咲く。

—稲子跳び 蝶々乱舞す ヨルアンジ エデンの園に蜘蛛は巣を張る—

頂上稜線地帯が桃源郷のような700m程のオルムに登った(8月)。「ノロ鹿が二匹畑を跳躍して横切った。道端で生存競争が展開している。トンボが蟻に食らいつかれて、足をぴくつかせている。セメント農道に矢印の列が横切っている。雪原で見た山鳥の足跡と同じだ。セメントを打った直後に山鳥が歩いたのだ。…(頂上稜線に着いて)台地は野生花が咲き乱れ、アゲハチョウなどの大型の蝶々が飛び交っている。7、8ヶの巨石が立っている。蝶々が飛び交う野生花の中の散策である。漢拏山が東方に見える。…広い頂上稜線地帯は、巨石群、野生花、蝶々などが織りなす桃源郷である。真夏、汗かきは2リットルの水を飲んだ。」

・1200m程のオルムの頂上から漢拏山を眺めて時を過ごした(8月)。「北方向寄りに済州市街が見える。北の漢拏山頂上辺りは、流れる雲で見え隠れしている。谷から雲が濃淡を変えながら、上昇していく。山の景色は、刻々と千変万化していく。漢拏山の長い山稜と山の重厚が迫ってくるようだ。山容を1時間近く眺めていた。

—頂上に 懸かりし雲の 造形に 時を忘れて 我を忘れる—

・樹林に囲まれた静かな頂上に座っていると突然の咆哮に驚かされた(8月)。「カップソニオルム(甲蟬岳)の頂上、墓に染み入る八月の蟬時雨、無限の静寂が流れる。突如、ノロ鹿がグワーグワーと怪物のような声で吠える。」

(3) 秋

・400m程の低いオルムにも秋の気配を感じることができる(9月)。「今の時季は、コスモスが満開である。ススキが出始めている。そのうちススキの海原が銀色に輝くだろう。バッタなどの虫の動きに元気がない。コオロギの季節になったのか。草むらで見るカマキリは、緑色から茶色に体の色を変えている。セミの鳴き声を聞かない。涼しくなった証拠だ。山を歩いていると、季節が日に日に確実に移ろいでいくのを虫や草花で感じる。伐草(ポルチョ、お盆前の墓の草刈り掃除)の時期である。」

・集落の中の100m程のオルムで秋を感じる(9月)。「ツクツクボウシが鳴く。秋の虫がコロコロと鳴く。最後の夏の陽射しのようなのである。既に秋の穏やかさを感じる。…コスモスが咲き、ススキが揺れる。路肩には、陸稲の籾が筵に広げられている。」



・450m程の低いオルムにも秋色が横溢している(10月)。「秋の情緒が横溢している。アザミの紫、野菊の白と黄色、ラベンダーのような花の紫、ススキの灰色と小豆色など色彩豊かである。…ススキの野は、灰色のようで、陽が射すと銀色にかがやき、曇ると黒ずむ。一瞬の間に、この色の変幻が起こる。…気分が晴れやかになる広闊な風景である。牛が放牧されている。山鳥が50m先に降りる。バッ

タが元気に跳ねる。リンドウが美しい。…」

・深山のオルムとゴルフ場にあるオルムで、秋の静謐に浸る(10月)。「少し紅葉し始めた樹林もある。…木漏れ陽が明るい。穏やかな風が小枝をサワサワと鳴らす。そして自分の足音、立ち止まると静寂、風、樹海。…この辺りの景色には、自然の要素が交響しあい、岩、苔、草地、樹木、木漏れ陽、風、静寂が諧調の妙をなしている。」「ゴルフ場のボウルの打球音がよく聞こえる。虫の鳴き声が弱々しい。山裾のあちこちで白く輝いているのは、ススキだ。白い畑はソバの花だ。急に、霧が張り出し、周りのゴルフコース、オルムが一瞬にして掻き消え、乳白色の世界に一変した。菓子を食べながら、霧の消えるのを待った。霧の乳白色に溶解してしまったような静かで不思議な時間である。」

・豊かに実る結実の秋は、生命の退出を強いる非情の季節でもある(10月)。「ノロ鹿が屯した跡なのかフライパンのように浅く窪んだところがある。カサッと乾いた音を立てて落ちるドングリ、寿命を全うする前の瀕死の蝶、動きが鈍く背羽が茶色になった蠅(カマキリ)は、豊穰の秋の非情なる証である。」「陽射しが強く、汗が顔から滴り落ちる。しかし、心なしか秋の優しさをたたえている。跳びはねるバッタの数も少なくなり、跳び方にも元気がなさそうだ。残る寿命は幾日であろうか。必滅。」

・500m程のオルムの頂上から朝の漢拏山を眺めた(11月)。「(雨上がりの午前10時頃)漢拏山の頂上部と麓の底部だけに雲が棚引いている。墨絵のような濃淡である。妙なる朝靄の墨絵である。清澄な景色も良いが、墨絵の景色も何ともいいようのない深みがある。」



(4) 冬

・冬の景色を描写した部分のメモは少なく、それも主に氷と霜柱である(1月)。「熊笹がパリパリに凍りついていて歩き難い。ススキと松の枝に氷が付着し、氷の魅力的な造形物を作っている。」「霜柱がパリパリと鳴る。木枯らしが枝を揺らし、ビュービューと鳴る。毛糸のキャップが汗に濡れて冷たい。」「(下山しようとする)急に吹雪となる。視界が悪くなる。茨を突いて下山しようとしたが、茨に閉じ込められる羽目となり、登って来た道を逆ルートで下った。」
(つづく)